

---

# 俺の狂科学がこんなに最強なわけがない

白蜜印のメイド漬け

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の狂科学がこんなに最強なわけがない

### 【Nコード】

N8456W

### 【作者名】

白蜜印のメイド漬け

### 【あらすじ】

生まれながらにして最強の魔術を持つ高校生、坂魔狂太郎。ありふれた日常を渴望する狂太郎にとって、この力は障害でしかなかった。そんな邪魔な力を狙って、本家の魔術師達が狂太郎を襲いかかる。「バカ野郎。これ以上、俺の日常を破壊させてたまるか」最強の高校生、坂魔狂太郎の戦いは始まった……！！

## 1 この世で最も強い高校生

坂魔狂太郎について。

彼と親しい友人に訊いてみた。

「狂太郎？ あー、あいつは最強。冗談抜きで最強だ。俺が狂太郎に出会った時も、あいつの周りには一千人の暴走族が土下座して謝ってたからな」

彼のクラス委員長にも訊いてみた。

「坂魔君？ 坂魔君はいい人ですよ。みんなは怖がっているみたいですが、彼はとても優しいんです。前も、私が先生に頼まれて教材を運んでいた時に、彼が一人で運んでくれたんです。三十冊の広辞苑を一度で」

彼の幼なじみにも訊いてみた。

「狂ちゃん？ あっ、いやっ、狂太郎！？ 別に、あいつとはただの幼なじみで……。はっ？ 関係じゃなくて印象！？ べべ別に、フツーなんじゃない！？」

デレた。

彼と全く面識のない先輩後輩にも訊いてみた。

「坂魔さんは……」

「やめろ！ 死に急ぐな！」

「坂魔様は……」

「それでいい。またあの力を使われたら終わりだからな」  
人は彼の最強の力のこと、思い様々、口を揃えて言う。

あれは、魔術ですよ、と。

この内容を映した映像を見せられた張本人の感想は。

「何度も言わせるな」

彼は言う。

これは、魔術ではない、と。

『これは、狂科学だ』

その思いの丈を

正面でカメラを回す魔術師に向かって。

## 2 坂魔家の日常

何気ない一般家庭の朝。

家族で食卓を囲み、朝食を共にする。

そんな当たり前の幸せが、ここ、坂魔家にもあった。

姉の剣（つるぎ）の悩みと言え、近頃、息子の狂太郎の帰りが遅くなってきたこと。

まあ、年頃の男なら、帰りくらい遅くはなるものだ。  
むしろ、それぐらい元気であつてもらった方が嬉しい。

「と、剣姉さんは思うわけなんだが」

「ご飯の盛られた茶碗を渡しながら、剣は言った。

茶碗を受け取る狂太郎の手は怒りで震えている。

「わけなんだがじゃない。朝食に帰宅する高校生のどこが健全だ」  
時刻は午前七時。

狂太郎が帰宅したのは、ほんの数十分前のことだった。

「相手は誰だ。天狗か。避妊はしたか」

天狗とは、お隣の娘さんのことだ。

幼なじみであるため、狂太郎にとってすれば、そのような対象にはならない。

「朝っぱらからヘビーなもんを食らわすな。それより、卵焼き焦げてるぞ」

奥のキッチンで黒い煙が上がっていた。出どころはフライパン。

弁当用の卵焼きを作っていたところだった。

「ああ、すまない。忘れてた」

剣はキッチンに戻った。後に続くように、狂太郎は冷蔵庫から岩海苔の入ったビンとタマゴを一つ持ってきた。

向かいのテーブルで朝食を取る。

ほっかほかのご飯にスプーン一杯の岩海苔を乗せ、その上に“溶き卵”を掛ける。醤油はいらない。岩海苔の味付けで十分なのだ。

「……あ、箸忘れた」

キッチンに目を向ける。剣がフライパンから焦げた卵焼きを剥がすのに苦戦していた。

力一杯、フライパン返しを使って奮闘していると、誤って焦げた卵焼きが床に落ちてしまった。

「……………」

すかさず、剣は焦げた卵焼きを掬ってフライパンに乗せた。

「よし、セーフ」

「アウトだよ」

「大丈夫だ。お前は最強だ。一万と八百の全ての魔術。その中に除菌の魔術があるからな」

「またそれか」

何気ない一般家庭の朝。

家族で食卓を囲みながら、朝食を共にする。

そこでの話の種に、必ず、その言葉が入ってくる。

「俺には、魔術なんかない」

“魔術”。

かつて存在したとされる代物。

現在には存在しないはずなのだが、坂魔家は滅びたはずの魔術を持っている。

「否定しても無駄だ。坂魔家は魔術一家だ。その血筋を持つお前にだって魔術はある」

剣は更なる追及をする。

「現に、お前は箸もなく溶き卵を作っただろう」

テーブルには、卵の殻すらなかった。

「それをどう説明する。物質変換と消滅の魔術を使ったからだろう」

「違うな。これは、魔術などではない」

狂太郎にとって、魔術とは。

日常を脅かす代物。

そのせいで、小中と悲惨な日常を送ってきたのだ。

だから、高校入学を機に決めたのだ。

魔術には関わらない、と。

だが、関わらないようしても、むこうは関わってくる。

離れようにも離れられない。こればかりは仕方ないこと。

しかし、だからと言って、そのまんま認めるわけにはいかない。

そこで、狂太郎は考えた。

魔術なんて忌々しい言葉を、もっと和やかにして置き換えよう。

そう、これは、科学。

現代でも証明のつく代物。

ただ、普通より少し特別なだけのこと。

坂魔狂太郎の科学なだけのこと。

「狂科学」だ」

### 3 美人な幼なじみの方程式？

剣は呆れていた。

「お前、今までの全てを科学で証明できると思っているのか？」

「狂科学とは、そういうものだからな」

ふふつ、と、狂太郎は誇らしげだった。

実の息子だが、時々、何を考えているのか分からなくなる。

剣の本当の悩みは、たぶん、これだ。

返す言葉もない剣をよそに、マイペースに朝食を済ませた狂太郎が席を立つ。

時間は七時半を回った。そろそろ家を出なければ、遅刻になってしまう。

別の椅子に立てかけておいたスクールバッグを取り、出かける準備に入る。

「いい加減、剣姉も諦める。魔術なんてものはない。あるのは、科学。そう、剣科学だ」

などと言いつつ、食器類をキッチンに運んで、弁当をスクールバッグに入れて、準備完了。玄関に向かい、扉を開けた。

「朝までには帰る。当然だ」

ボタン、と、扉を閉めた。

「朝までに帰る……か」

壁に吊されたカレンダーを見る。

「昨日も聞いたぞ、それ」

\*

玄関を開けてすぐ、門の手に黒いショートカットの女の子を見た。

空庭天狗。狂太郎の幼なじみだ。

登校日の朝は、こうして門前で待っている。

どうやら狂太郎に異性として好意があるようだ。

「あ、狂太郎。遅いよ」

「そっちが勝手に待ってたんだろ」

振り払うようにして、狂太郎は門を通過する。

天狗は、先に行ってしまうおとする狂太郎の後に付いた。

「昨日も帰ってくるの遅かったけど、また魔術師と戦ってたの？」

「科学者な。それと、昨日じゃなくて今日だ」

「狂太郎も苦労するねえ。魔術なんて持つてるばかりに」

突如、狂太郎は後ろを振り返り、突き刺すように天狗を指差した。

「“狂・科・学”だ！」

結構、顔が近い。天狗はすぐさま引き下がる。

「分かった分かった！」

スクールバッグで顔を隠す。まったく、あんな距離で見たら、

心臓が止まってしまいそうだ。

「まったく……、本来なら美人な幼なじみと登校なんて非現実的な

シチュエーションすら許されないというのに……」

ぶつぶつと愚痴をこぼしながら、狂太郎は前を進んだ。

そつとスクールバッグをどかす。

天然、なのだろうか。

(美人の幼なじみって……)

とは言え、心の中では、やっぱり嬉しかった。

狂太郎の後を歩くその足取りも軽かった。

#### 4 朝ゾンビ!

学校に到着する。

天狗との距離を少し空けて、狂太郎は二階にある教室へと向かう。季節は春。目につく生徒達も、まだブレザーの着用が目立つ。

ちなみに狂太郎は長袖の白シャツのみ。アクセントとして長ネクタイをしている。

今に限ったわけではない。年中、この格好なのだ。強いて変化点を挙げるなら、シャツの袖の長さが変わるくらいだ。それ以外、何も変わらない。

何故、この格好にこだわるかと言うと、中学時代に悪い思い出があるからだ。

中学時代、狂太郎が皆と同じようにブレザーを着用していると、その風貌からか、次第に番長と呼ばれるようになっていた。

既に魔術が使えていたので、その辺の噂も加味された結果だ。

以来、狂太郎はブレザーを敵視するようになった。悲しい中学時代である。

教室に到着した。

「おはよう!」

狂太郎は皆に笑顔と挨拶を配る。

「お、おはよー……」

魂の抜けた、あるいは抜かれた声で返される。

賑やかだった教室が、一瞬にして氷河期に突入したような空気になった。

狂太郎は自分の席に着く。ちょうど教室の真ん中だ。

背が高いので、かなり存在感がある。

「また科学者と戦ったのか?」

右隣から高校球児のような爽やかな声が届く。

良き理解者であり親友である、五月屋霧雨こつきやきりさめだ。

「ああ。だが、こればかりは仕方のないことだ」

天狗は離れた席で、女友達と話をしている。

その間を、甘い花の蜜のような香りが通る。

香りに釣られて、そちらを振り向くと、アヤメのような淡い紫色の髪色をした女がいた。

見たことのない生徒だった。少なくともこのクラスの生徒ではない。

女は目標が決まった歩き方をしていて、その矢印が狂太郎に向けられていることが見て分かる。

それにしてもいいカラダをしている。モデルのようなスラリと伸びた身長と美脚。まさに女の子の願望が凝縮されたスタイルだ。

そんな美人が、何故、狂太郎に？

天狗の関心は、女友達の会話ではなく、その謎の美人に向けられていた。

「でな、危うく落ちた黒こげの卵焼きを……」

狂太郎は話を止めた。否。止められた。

首を絞められ、厳密にはネクタイを引っ張られて。

刃のような切れ長の瞳が突き刺さる。

「お、お前、昨日の科学者……」

数センチ先には、見覚えのある顔。

狂太郎は、この女を知っている。

「科学者じゃないし、魔術師じゃないし、人間でもない。      ゾン

ビよ。あれだけ殺しておいて、もう忘れたの？」

刺激的な一日が始まった。

## 5 衝撃的な魔の夜

それは、忘れもしない衝撃的な夜だった。

帰路を遠く離れ、狂太郎が迷い込んだその場所は、長い鉄橋の上。数十メートル先を見下ろせば、川が流れている。

息切れする狂太郎の後ろには、魔術師がいた。

だけど、そいつはいつもの魔術師とは違った。

自分を科学者とも魔術師とは言わず、それどころか人間ではないとまで言ってきたのだ。

じゃあ何者だと訊いた時、返ってきた言葉がこうだ。

「ゾンビ」

嘘なのか本気なのかは定かではない。

ただ、いつもの魔術師と違って、魔術を殺しても復活してくる。

これ以上逃げても、埒がない。それ以前に帰りがとんでもないことになる。

十数メートル離れた先で、狂太郎は自称ゾンビのその女と向き合った。

「全く息切れしてないのな」

声は反響する。

「そういうカラダだから」

やけに色っぽく感じるのは、声のせいだけではないのだろう。

「死なない科学か」

「さっきも言ったけど、私は科学者でも魔術師でもないから、これは体質的なものね」

「ふふふ、あくまでもゾンビと言い張るつもりか」

「事実だから覆しようがないわ。そもそも、死なないという点だけで言えば、あなたとも共通することなのよ」

この女は、狂太郎が一万と八百の全て魔術を使えることを知っている。

狂太郎の経験上、そういうのは全員、魔術師だった。  
だから、この女も

「……何故、俺を追う」

「追うんじゃないくて、殺すの」

「殺される覚えはないのだが、一応聞こう」

「そうね。手短にまとめると、あなたが無意識に使っている魔術が、少なからずマイナスに働いているってことかしら」

「俺は科学で他人に悪影響を与えてなどいない」

「あなたはそのつもりでも、相手にとってすれば、そうとも限らないんじゃないかしら」

「どういう意味だ」

女は少し悩み、躊躇っていた、というより、説明が面倒で後回しにしたことを話すことにしたようだ。

「そうね。例えば、一冊の推理小説があるとして」

「おいおい。そんな話は聞いていないぞ」

「面倒ね。いいから黙りなさい。それとも」

女が左右に突き出した合計十本の指の先で、鋭く輝く銀色の光が見えた。

一瞬の光を放ったそれは、解剖用の小刀である。

「黙らされるほうが好みかしら」

女は己の性癖を惜しみなくさらけ出してやった。

「私としては、黙らすのも黙らせるのも黙らされるのも好みなんだけど、いかがかしら」

流暢に性癖をさらけ出していると……

パキン

十歩のメスが文字通り粉碎された。

キラキラと舞う銀色の粒が、ゆったりと地に眠る。

「お前の性癖はよく分かった。だからこれ以上、無意味な戦いはやめろ」

「無意味な戦いじゃないし、私の性癖も解ってないわ」

狂太郎は驚きの光景を目の当たりにする。

粉碎したはずのメスが、厳密にはそうなった粒の集まりが、女の手元に吸い寄せられているのだ。

それは完全に重力を無視した動きであり、そうした動きによって復元された十本のメスもまた、色んなものを無視している。

「厳密に言えば、あなたは不死じゃない。何故なら、あなたには一万と八百の命しかないのだから」

「それはつまり……なんだ。一万と八百回俺を殺す自信があるということがあるか」

「殺すのは最後の一度切り。それまでは、一万と七百九十九回までは、勝手に放題ってこと」

女は心底嬉しそうな顔を浮かべていた。

認めよう。この女はゾンビだ。

ただ

化物ゾンビみたいな感性を持っているという意味で。

「不死というのは、死なないだけで痛みは感じる。一般的には不老というボーナス付きだけど、それでも痛みは感じる」

「逆に言えば、一生痛め続けられる、ってことか」

「あら、解ってきたようね。でも惜しい。百点の解答は、痛め続けるのも痛み続けられるのも、でした」

「まあ……“魔術”が嫌いな俺だが、そんな俺でもやっぱり死にたくはないんだ」

トン 狂太郎はその場で軽く足踏みをした。

すると次の瞬間

バキッ……！！

「酷いことするのね」

鉄橋が半分、折れた。

女の立つ方を残し、中心からポッキリと。

幾数の破片と共に落下する狂太郎だが、この数ではまず死なないだろう。

「お互い様だ」

盛大な水飛沫と音に紛れ、気付いた時には、狂太郎の姿はその場にはなかった。

一人取り残された女は、気分的に折れたそこから川を覗き込んでみたくなり、ゆっくりとそこに座り込んでみた。

「あんな大きな落とし物して。私がゾンビじゃなかったら、新聞の一面を飾つてるところだったわ」

むくり、と、橋の破片を川の水を垂らしながら、浮き上がってくる。

「さてと……朝が来る前に帰らないと」

ゾンビに朝は向かないわ。

## 6 洗淨院魂慧の入学初日

つい数時間前までの悩みの種が、また目の前に。

狂太郎は自分を恨んだ。己の人生に溜め息が出る。

「狂太郎、知り合いか？」

「……ああ、がつつりな」

「あら嬉しい。がつつりだなんて」

自称ゾンビ女のマイペースっぷりに、違った溜め息が出る。

何やらただ事ではない空気。そう感じ取った天狗が、前に身を乗り出してきた。

「ちよつとあなた何者！？ 急に教室に入ってきて！」

挑発的な天狗の態度に、しかし自称ゾンビ女は乗らない。

それどころか目すら合わせていない。

腕を組んで、毅然とした態度で立っている。

その反抗的な態度が、逆に天狗を挑発する。

「む、無視する気！？」

「そう怒らないで。天狗さん」

と、ごく丁寧に仲介に入ってきたのは、おさげと縁眼鏡がポイントの黒屍綺羅羅だ。

彼女は、学級委員だ。

「委員長！ だって、この子が……」

「彼女は、洗淨院魂慧さん。今日からこのクラスの仲間になる方なんだから」

今日からクラスの仲間になる。

委員長のその言葉を、天狗が、そして狂太郎が、咀嚼し、こう理解した。

「て、転校生……？」

にっこり笑顔で、委員長は言葉を返す。

「転校生じゃなくて、時期的には私達と同じ新入生ね」

何かが崩れ落ちた音が、二人の中で聞こえた。

\*

狂太郎が魂慧をそこに呼び出したのは、一限目終了後のことだった。

「屋上に呼び出しなんて、随分と古典的な手法を取るのね」

やはり毅然とした態度で立つ魂慧に、狂太郎は、俄然腹が立つてきた。

「このシチュエーションを馬鹿にするな」

「シチュエーションだなんて、そんな……」

「その演技臭い言い回しはやめろ。聞いててイライラする」

と、ここで、魂慧のペースに落ちている自分に気付く。

「……お前、何だ。わざわざ同じ学校にまで入ってきて」

「一つ訂正するなら、別にあなと同じ学校に入ったわけじゃないわ。たまたまよ」

何とも信用できない言葉だ。

「……まあ、そういうことにしておいてやろう。でも、結局は俺の命を狙ってるんだろ？」

「絶好の監視下だとは思っけど、人殺しをするには不適切だと思うわ」

どうやら狂太郎が思っていた理由で入ってきたわけではなさそうだ。

「本当に、ただ学校に入っただけなのか？」

「あなたにはそう考えてもらっていいわ」

「なんだそりゃ？」

「他意はないわ。それよりいいの？」

お気に入りの屋上シチュエーションも、入って初日の新入生を呼び出すとなれば、十分に非日常的だけでも」

言われて気付く。

そういえば、俺はこいつを知っているだけで、皆からすれば、魂  
慧の言う通りだ。

「いかん……。これ以上の崩壊だけは免れねば！」

狂太郎は颯爽に、屋上から姿を消した。

「……おかしな人ね」

偶然なのかどうかは知らないが、話していたその場所は、日陰の  
ある場所だった。

## 7 午後の三角地帯

その後も魂慧を警戒し続けてはいたが、彼女は特に変わった様子もなく、普通に授業を受けていた。

新入生とあつて、周りからも物珍しい反応されていたが、逆に怪しいくらいに全て応えていた。

何か危険なことを考えているのではと思っていたが、考え過ぎなのだろうか。

複雑な心境のまま、昼食を迎える。

狂太郎はいつも通り、霧雨と昼食を共にする。

そしてこれもいつも通りと言えればいつも通りなのだが、

「お前は女友達と食べばいいだろう」

天狗も昼食の輪に入ってくるのだ。

他人の机を我が物にし、こちらの机にくっつけてくる。

傍から見れば、この教室中央に出来る三角地帯は見慣れたものだろう。

狂太郎はあまり歓迎していないのだが。

ちなみに昼食は霧雨のみがコンビ二で買ったもので、他二人は弁当持参だ。

机上に各々の昼食を広げる。

狂太郎の弁当は妙な空白が目立つが、天狗のは見た目も栄養も考えられた素晴らしい内容だ。

脇目で見る。触れると調子付くので触れないが、本当に素晴らしい。こういう料理上手な嫁が欲しいものだ。

「剣さん、またやったの？」

「毎日の恒例行事にされちゃ身が持たん。後、そのレモンくれ」

天狗は切ったレモンを一枚と、肉も少し分けてあげた。

「高校生が昼間からビタミンを要求するなんて悲し過ぎるから、それ食べて力つけなさい」

むしゃむしゃとコツペパンを頬張る霧雨。

「空庭は狂太郎にベタ惚れだなー」

冗談で口にした一言だったが、天狗は容姿しない。

素早い手捌きで箸を眼球寸前まで近づけてきた。

「ほ、本気にするなよ」

「物騒なランチタイムね」

二人の間を割ってやってきたのは、魂慧だった。近くの机を引きずって、どうやら昼食を共にする気のようなようだ。

「洗淨院、お前も他に女友達がいるだろ」

「自分で言うのも何だけど、私は国内の一般女性の平均値は越えていると思うのだけれど。それとも坂魔君は異常値の女性でないと満足しないのかしら？」

「論点がズレてるが……まあいい。最近、この午後の三角地帯を巡って良からぬ噂が流れているからな」

「良からぬ噂がここで止まるとも限らないわ」

不吉なことを言いながら、魂慧は席についた。ちなみに彼女も弁当持参だ。

「私のお弁当に熱い視線を送っても、何も答えてくれないわよ。坂魔君」

「何か儀式めいたものが出てきそうで怖いんだよ」

「そうだったら、術式破壊の魔術を使えばいいじゃない。絶対防衛の魔術も付加すれば、相殺の魔術も効かないのだから」

狂太郎は黙々と飯を食い続けることで、話を無視した。

熱い視線といえは、もう一人、別の人物が 天狗越しから送っていた。

委員長の綺羅羅だ。

## 8 いくらなんでもそれは反則だ

魂慧の箸の動きが止まっていた。

「……………」

何か考え事をしているのか、あるいはただ単に満腹なのか。

しかし、仮に後者だとすれば、その弁当の容量はあまりに矛盾を感じてしまう。

魂慧が持参したお弁当の中身は、野菜抜きのがつつりとした内容だった。

こんながつつりとしたお弁当を持参するのだ。満腹というラインは捨てていいだろう。

だとすれば、後は

「……………考えごとか？」

遠回しに指摘されたからか、魂慧は再び箸を進めた。

「そうだとしたら、あなたにとっては好都合なんじゃないかしら」

「そういうわけでもないぞ。友達の悩みを受ける。俺の理想とする日常の一つだからな」

誇り高く胸を張って、狂太郎は宣言する。

食を共にする霧雨と天狗からは、ささやかな微笑みが送られている。

「……………やっぱり、あなたはおかしな人ね」

「やっぱりとはなんだ！ やっぱりとは！」

「そのままの意味よ。それからご飯の粒をこちらに飛ばさないで、気持ち悪い」

「ああ、悪い。……って、気持ち悪いとか言うな！」

魂慧はその後、黙々と箸を進めていた。

\*

昼食後の体育というのは、学生にとってはとても苦しいもので、当然のようにその点は狂太郎も共感しているのだが、唯一異なる点があるとすれば、それは、その苦しさに日常の素晴らしさを感じていることくらいだ。

パンツ……！！

八段の飛び箱を三回転半込みで飛んでみせたのは、魂慧だった。

拍手喝采の道を、冷静に通り過ぎるその姿はたくましいと思えた。

「すごいな、洗浄院。体育会系なんだな」

昼食後以降、魂慧は狂太郎達と連むようになっていた。

「そんなことないわ。たまたまよ」

こうして謙虚にするあたり、まともな一面はあるようだ。

てつきり、ゾンビだから身体能力抜群で　とか言ってきたそうだから。

「……というより、どうなんだ。その格好は」

今では珍しいブルマの姿が、そこにはあった。

まだジャージを用意できていないからだと言うが、その年齢でそのVラインは些か反則なんじゃないだろうか。

「どうもこうもないわ。私はあるのままで晒しているだけよ」

「晒すとか……いちいち引つ掛かる言い回しをするよな。お前って」

「そのお前という呼称は、親友に送る言葉としては違和感があるわ。

敬意を込めて魂慧様と呼びなさい」

「“魂慧”な」

そしていつの間にか、嫌っていたやつと友達になっていた。

## 9 螺旋殺人

午後の授業が終わる。

校舎内の掃除をグループごとに済ませ、帰りの時間となった。

明日の日程などを軽く話す担任教師。至って警戒することのないその話を、人を殺すような目つきで聴く者がいた。

狂太郎だ。

彼は別に話自体に警戒しているわけではない。

この後、つまり自宅へ帰る最中だ。

また揉め事に巻き込まれると、朝帰りの記録を更新するという大変不名誉なことになってしまうため、狂太郎にとってこれから戦いとなる。目つきが悪くなるのも領けよう。

「はい。じゃあ、黒屍」

「起立。礼」

「さようなら」

最後の挨拶も終わり、いよいよ狂太郎の戦いが始まる。

霧雨と天狗の呼びかけにも応えず、ダッシュで教室を飛び出る。

どうやら彼の中の危機回避の仕方は、ただひたすら早く帰宅することのようだ。短絡的にも程がある。

「洗淨院さん」

綺羅羅から魂慧に声がかかった。

帰る支度をしていた最中の出来事だ。魂慧は綺羅羅の方を振り向いた。

「狂太郎君のことで話があるから、少しいい？」

\*

「うちの学校ってね、昔は心靈スポットとして有名だったんだよ」と、螺旋階段を下がりながら、綺羅羅は言った。

仄かに照らされる灯り。どこか神秘的な雰囲気を感じさせる光だ。しかし、下に行くにつれて、その光は消えていく。

「この螺旋階段で転落事故が多発して、前に死んだ人が道連れにし  
たんじゃないかって」

「委員長は霊的なものを信じるキャラクターなのね」

「だって、この世には魔術だってあるんだから、幽霊だって存在す  
ると思うなー、私は」

螺旋階段も中盤に差し掛かった頃だ。

「さっきの話には真実があるの。あれは全て事故に見せかけた  
殺害で、多発化の原因も道連れじゃなくて、ただの連続殺人。実は  
殺された人間は全員 “魔術師” なんだって」

タンツ……、止まる。

「なんだってじゃなくて」

振り返る。

「そうなんだよ」

にっこり笑顔の綺羅羅。

「ええ、でしょうね。委員長からは血の臭いしかしないもの」

「しょうがないかな。だって、私 “吸血鬼” だから」

## 10 再生の裏返し

「吸血鬼……へえ、そう」

割と素直に魂慧は頷いた。

綺羅羅はやつぱり笑顔を崩さずに、

「勘違いしないでね。吸血鬼だからって見境無しに吸血行為をするわけじゃないから。人間の血はおいしくない。ううん。実際はおいしいけど、それ以上に外れた人間の血がおいしいから、私はそっちを選んでるだけ」

つまり、要約すると。

「私って、グルメなの」

「新人初日に狙うなんて、グルメというより、血に飢えた獣ね」

それがお望みならばと、魂慧は戦闘態勢に入った。

フツと別の人格が降りてくるような感覚。魂慧の目の色が変わる。

「いいわ。あげる」

魂慧は階段を強く踏みつけ、高く跳躍した。

そこについてくる一枚の石段を空中で掴み、綺羅羅に向けて投げつけた。

鋭利な刃のように飛ばされた一枚の石段を、綺羅羅は素手で薙ぎ払い、粉碎した。

「……いいの？ この時間だとあなたの再生能力は使えないのに」

「さすが成績優秀な委員長ね。勉強熱心でいいことだわ。だけど、その回答は満点ではないわ」

ぶらん、と、綺羅羅の石段を受けた腕がぶら下がる。

正確には、そちら側の袖が。

つまり、それより先に手はない。

鋭い痛みで顔を歪め、腕の状態を理解した。

満点ではない。魂慧の顔を見て、その言葉の意味を知らされる。

「分かったみたいね。ゾンビは再生だけでなく、破壊も得意なの。」

「厳密には腐敗かしら」

「腐らせたのね。肉も骨も」

「そういうことになるかしら。私のカラダって思ってた以上に弱いけど、思ってた以上に強いよ。……まあ、それでも坂魔君ほどではないのだけれども」

「とりあえず、訊いてみる。」

「ところで、私ならもう少しくらい階段を破壊してあげてもいい。つそ全て破壊してあげてもいいんだけど、委員長はこの後、どうされたいのかしら？」

「……日を改めるわ」

「適切な判断ね。そうするといいわ」

「見逃してくれるんだ」

「別に私は殺人嗜好ではないから。血を吸うだけが目的なら、見逃すことくらい、安い話だわ」

## 11 屈曲るシナリオ

すっかり日が沈まった放課後の学校を魂慧が歩いていると、偶然にも狂太郎とばったり出くわした。

「なっ、何でお前がここに!？」

全力疾走していたので、立ち止まった今は酷く息切れしている。

そんな姿を見苦しく、ケダモノを見るような目をしながら、魂慧は狂太郎と話していた。

「私が学生という身分で正しいなら、ここは正当な場所だと思うのだけれども」

「いや、そういうわけじゃなくてだな」

「それから、お前という呼び名はやめてくれないかしら。見苦しい上に聞き苦しいなんて最悪だわ」

「おい、今、さり気なく誹謗中傷する言葉が混じってなかったか?」  
「勘違いさせてしまったようね」

改めて、誠心誠意を込めて、魂慧は言う。

「坂魔君は見苦しい上に聞き苦しいので最悪だわ」

「わざわざ言い直すな!」

と、狂太郎の目に魂慧の格好が入ってきた。

「……随分と服が汚れてるが、何かあったのか?」

言葉は濁しているが、制服には、明らかに血と断定できる赤色が付着していた。

「そうね。私は美人だから、そういう事件に巻き込まれてもおかしくないわ」

「………そういうの、冗談でも言うなよ」

狂太郎の冷めた瞳が、魂慧の胸に突き刺さる。

「優しいのね。でも、坂魔君が心配する必要はないわ」

辺りはすっかり真っ暗だ。

「もう暗いし、途中まで一緒に帰るか?」

「ゾンビをエスコートするなんて、なかなかの肝ね」  
「今は、学生だろ」

\*

「　　そういえば」

帰路の途中、ちょっとコンビニに寄り道をし、中華まんを買って  
食べるようになった。

お金は持ち歩かない性格だと謡う魂慧の為に、中華まんくらいと  
奢ってあげようとした狂太郎だったが、災難続きでお金を落とした  
り何やりしたせいで、ほとんどなく。

結局、一つを二つに割って食べるようになった。

ちなみに魂慧は意外と猫舌だった。

「この前、推理小説がどうか言ってたけど」

「別に深い意味はないわ。　　ただ、坂魔君が世界に与えている影  
響というのは、完成された殺人事件のシナリオを書き換えてるよう  
なものなの」

## 12 都合のいい残酷な世界

「……？ つまり……どういうことだ？」

魂慧は淡々と答えた。

「例えば、殺人事件が起きたとして、その殺された人物が坂魔君と仮定する」

「……お、おう。とりあえず、今は、俺は殺されてるわけか」

「そして、坂魔君には一万と八百の全ての魔術がある。死者蘇生の魔術は勿論、対象変更の魔術など……、状態・状況を覆す魔術はいくらでもあるわ」

「狂科学な。それから、俺は私利私欲の為に狂科学は使わない」

「そう。だから、余計にタチが悪いのよね」

途端、魂慧の無愛想な表情がぐくだけた。

「き、急にキャラが変わったな」

「坂魔君の考えは、正しい。正常と言い換えるべきかしら。正常なら意識しないと魔術は使えない」

けど、坂魔君は違う。魂慧は言う。

「坂魔君には、一万と八百の全ての魔術がある。これは完全なる異常。異常が故に、正常では考えられない現象が起こる。無意識

に魔術を使っているという自己防衛現象が」

「自己防衛現象？」

「つまり、坂魔君が車に轢かれそうになったら、坂魔君は無意識に発動させた魔術によって轢かれないうってことね」

「……それって、何かマズイのか？」

「それだけだったら、何もマズくはないわね。けど、その行為は世界の流れを止めるようなものだから、止めないよう……“代役”が置かれる」

ドクン、と、心臓が強く鼓動を打った。

「代役って……つまり……」

「そう　坂魔君以外の全ての人間・生き物。知人かもしれないけれど、通りすがりの犬や猫かもしれない。ただし、そこでは必ず何か死んでいる。この事実が変わらない」

無意識に発動させていた魔術が、狂太郎に都合のいい世界を作っていたのだ。

全ては狂太郎の為に。

それ以外は切り捨てても構わない。

独裁者のような発想の世界だ。

「結局、そういった行為の積み重ねが世界のバランスを崩してて

坂魔君が魔術師に追われてる理由は、これ以上、世界のバランスを崩さない為なのよ」

### 13 イエローセンサーシヨナル

朝食。

人によつてはそうではない者もいるだろうが、坂魔家では必ず、平日だろうが休日だろうが、毎朝朝食を取る。

例外なく、家族の一員である坂魔狂太郎も朝食を取るのだが、体調が悪いのか。今朝は一切、食事に手をつけていない。

グロテスクな具材を盛ったトースト。不思議と異臭のする目玉焼き。

……確かに手をつけたくないラインナップだが、これらのメニューは日常的に出されているし、見た目に反して味も悪くないので、狂太郎も普段は何事もなく食べている。実際、このラインナップも過去に食している。

なので、別にメニューに不満があるわけではない。

キッチンから顔を覗かせる姉の剣も、弟の異変に気付いていた。

「そんなにジロジロ見るな。剣姉さんの愛情がバレるだろうが」

と、ボケてみたが、ツツコミがない。

「……………」

食うべきか。食わざるべきか。

狂太郎は、迷っていた。

食ったら、また無意識に魔術を使って、誰かを犠牲にしないか。

食わなかったら、また無意識に魔術を使って、誰かを犠牲にしないか。

いか。

自分のせいで誰も犠牲にしたくない。

偽善にも聞こえる真理が、そこにはあった。

\*

昨晚の話をしよう。

狂太郎は、寝た。

厳密には、寝るか寝まいか迷っていた。  
迷っていたら、疲れて寝てしまった。

また誰かを犠牲にしたんじゃないかと、過言ではなく、本当に生きてるのが恐くなった。

いつそ、死んだほうがいいんじゃないかとさえ思うようになっていた。

だけど、それさえも。

\*

「うん。死ねばいい」

大音量の音楽。UKロック。ヘッドホンから音が漏れている。

黄色いジャージ姿の女がいた。

場所は、とあるトンネル。脇に電車が走っている為、通過する度に騒音が響く。

シヨートの白髪が、風に靡く。

金属バットと並ぶは、肌が晒された脚。長い。

バットの先端は、曲がっていた。

足元に散らばる人間も、曲がっていた。

あるいは真つ二つに。あるいは複雑に。

曲がっていた。

## 14 鬼神ミキの存在主義

歩いている実感もないまま、狂太郎は学校に向かっていた。学校に向かっているなんて実感すら、今はない。お隣の幼なじみである天狗が、今日もいつもみたく登校してくれているから、辛うじて、生きている実感を感じていた。自分の中では、もう死んでたと思っていたのだ。

\*

「なんだ？ 元気ないな」

学校に着くと、早速、親友の霧雨が狂太郎の異変に気付いた。

「気だるそうに着席したところから察するに、どこか体調が悪いのだろう……と、思った。」

「が、ここは一つボケでも入れて和ませよう。」

「朝から抜いてきたか」

「下ネタをぶち込んでみたが、恐ろしいほどに狂太郎の反応がない。逆に周囲の女子生徒が、霧雨を凄い目で見ている。席を若干、離された。」

「……重傷だな」

「色んな意味を込めて、霧雨は思った。」

\*

「私にとって、世界なんてのはどうだっていいんだ」

「と、鬼神ミキ（きしんみき）は言う。」

「まだ朝も早い時間だ。」

「通学途中の魂慧が魔術師の反応を感知し、後を辿ってみたら、ミキと出会った。」

金属バットという魔術に相反した道具を持った女だった。

「だって、私が死んでも世界には何の影響もないからね。興味の対象にはならないよ」

「まあ、あなたの考えはどうだっていいのだけれども」

挑発的なのか、それとも本当に馬鹿なのか。

まあ、格好から見ても、前者がそうなのだろうが、魔術師は本来、魔術師と悟られないよう、魔力を消している。

なのに、この鬼神ミキという女は、魔力を消す気配すらない。要するに、そういう女だ。

そういう女で、そういう魔術師。

一番、来てほしくも、居てほしくもない相手だ。

無論、戦いたくない相手でもある。

「ところで、これからあなたはこの町でどうするつもりなのかしら」

「うーん、とりあえず、すごい魔術師がいるって聞いたから、そいつと遊ぶよ。どこにいるか知ってる？」

「……ええ、知ってるわ。まあ、だからといって あなたに教える気はないのだけれども」

## 15 曲げる魔術師

洗淨院魂慧はゾンビだ。

刺殺、轢殺、絞殺 何をどう殺されようと、絶対に死なない。ただし、ゾンビならではの条件がある。

それは、午前零時から午前四時までの四時間以外は、通常の至って健康的な人間の体質と同じなのだ。

現刻は、午前七時過ぎ。

魔術師を相手にするには、早すぎる時間だ。

\*

ミキは、叩きつけるように金属バットを振り下ろした。

ガキン！！ という耳障りな金属音が、早朝の路地裏に響く。

相手がどういいう魔術を使うかわからないので、魂慧はミキの動作に合わせて、距離を置いた。

十メートル弱まで離れた時、ミキの魔術を見た。

バキバキバキバキ……！

「……主張の強い魔術ね」

凄まじい音を立て、アスファルトが、曲がった。

波を立てせるように、曲がったアスファルトが魂慧に迫る。

自身を覆う巨大な影から、魂慧は抜け出す。

二メートル幅の狭い路地裏の、隣の壁を蹴り上げ、重力を無視して上っていく。

「おお！ すげー！」

その光景に、ミキも驚く。

そんなミキをよそに、上っていく最中の魂慧は、ポケットから解剖用の小刀を十本ばかり取り出し、ミキに向けて素早く投擲した。

角度はばっちり。

が、ミキもまた素早く身を乗り出し、壁に設置される排水管を思いつ切り叩いてやった。

膨らんだ風船みたく排水管の一部が膨張した後、一気に爆発し、周囲に雨を撒き散らしながら、排水管のアップパーを食らわす。

水浸しになった魂慧はアップパーをダイレクトで受け、高く飛ばされた。

「はは！ 飛んだ飛んだ！」

ザシユ……………！！

「！」

ミキは飛来する小刀を次々と叩き落とした。

が、最初の一撃を右肩に食らってしまった。

「……………」

魂慧は飛ばされた際、空になった排水管に小刀を投げ込み、うまくスライドさせて、ちょうど穴を空けた本人の元にお見舞いしてやったのだ。

しかしながら、受けたダメージとしては、魂慧のが大きい。

胸骨と首の辺りをやった。

呼吸器官が無事なのが、幸いだ。

「曲げる魔術……………」

厄介な魔術だと、魂慧は思った。

先程の水を見る限り、対象にできるのは、物体のみなのだろう。

そして、一回曲げた後の数秒間は魔術が使えない。

その証拠に、十本スライドさせた小刀のうち、曲げられたのは二本目と十本目のみ。

残りは、ただ金属バットで打ち落としただけ。小刀は形状は曲がっていないし、軌道も曲がっていない。

そして、二本目から十本目の間は、およそ三秒間の隙があった。

勝てないわけではない。

「やれそうね」

バチン！！

物凄い炸裂音は、上空から。  
空から、魂慧が落ちていた。

気絶するその体が引いてきたのは “電線” だった。

十本目の小刀を打ち落とした際、その曲がった軌道が電線を捉え、切っていたのだ。

首から落下した魂慧から、鈍い音が響く。

首からの落下はもちろん、相当な電流。極めつけは、ずぶ濡れになつたカラダ。

即死の条件は、十分に満たしていた。

「なーんだ。アンタがそのすんごい魔術師だと思ってたのに」

ミキはバットを引きずって、魂慧に歩み寄った。

「ミキ、がっかり」

引きずったバットを振り上げ、魂慧にブツ叩く。

何度も何度も何度も。

魂慧の体中を、曲げた。

## 16 精神の崩れた音

狂太郎にその知らせが届いたのは、一時間目の授業を終えた頃だった。

洗淨院が

知らせを聞いた狂太郎は、一瞬、体を震わせ、大急ぎでそこに向かった。

階段を駆け下りて、着いた先は　ガラガラ。

「魂慧！」

保健室だった。

保健室のベッドに、魂慧が座り込んでいた。

それも、下着姿で。

「私は坂魔君にそこまで許したつもりはないのだけれども」  
ピュツと銀色の光が狂太郎の頬を横切った。

恐る恐るそちらに目を向けると、木製の扉に小刀が刺さっていた。

「……外したのか？」

意味不明な、正確には不適切なその質問に、魂慧は首を傾げる。

小刀で視線を誘導した間に、とりあえず服は着た。

「坂魔君的には、当ててほしかったのかしら」

「じゃあ、外したんだな」

ますます謎が膨らむ。

「まあ、いいわ。それで、坂魔君は何をしに来たの？」

「魂慧が大怪我をしたって聞いて、それで来たんだが……」

確かに外傷は見られるが、大怪我というほどではなさそうだった。

「ええ、大怪我よ。というより、死んだんじゃないかしら」

「言っている意味がよく……」

そうだろうと思い、魂慧は今朝方の話をした。

「つまり、その鬼神ミキの魔術で死を曲げられた……ってことか？」

「正確には、死ではなく体中の臓器やその他の器官ね。中は無傷なのに、外の傷が残っているのは、恐らく、そういう理由からね」

ふと、魂慧は違和感に気付く。

魔術。

あんなにも頑なに狂科学だと言い張っていた狂太郎が、あっさり  
と魔術と口にしていた。

「……」

先程の不適切な質問といい、何かがおかしい。

「とりあえず、大丈夫ならよかった。本当に……」

バタツ　世界が歪んだ。

「！　坂魔君！」

一瞬にして、世界は闇に覆われた。

## 17 一万と八百の全ての魔術

狂太郎が目覚めたのは、倒れてすぐのことだった。時間にして一分足らず。

ベッドに寝かすつける暇もない時間だった。

が、倒れた場所が偶然にもベッドの上だったので、魂慧は、使っていたそのベッドを明け渡した。

目覚めた狂太郎は、しばらく言葉を発せなかった。

「どうやら、私の助言が相当な負担になっていたようね」  
間を埋めるように、魂慧が独自の考えを述べる。

「……何なんだろうな」

狂太郎が起き上がる。大丈夫？ と魂慧が訊くと、首を縦に軽く振った。

半身起こしたまま、狂太郎は心境を白状した。

「魔術師達にすれば、喉から手が出るくらいの魔術なのは、俺には、ただ不便にしか感じない」

そんなに欲しいならくれてやりたいよ、と、悲しそうに狂太郎は呟いた。

「誰であろうと一万と八百の全ての魔術を持てば、同様の立場になるわ」

「……今となつては、自分の家系が憎いよ。何で俺は魔術の家系に生まれたんだろって」

家族に不満があるわけではない。

剣には、感謝しても足りないくらい感謝している。

憎いのは、その血。

たぶん、というより、絶対。この血筋じゃなければ、もっと平和に過ごせた。

「そう思えば思うほど、俺が理想とする日常から遠ざかっている気がする」

「坂魔君は日常に憧れを抱き過ぎだわ。……まあ、それでも坂魔君にとつての理想とする日常というのは、輝かしいものなのだろうけれども」

\*

二時間目の授業が少し経った頃、狂太郎と魂慧は教室に戻った。真つ先に天狗が反応していたが、今は授業中。事情を説明し、席についた。

「少しはよくなつたみたいだな」

振り返らず、独り言のように霧雨は告げた。

「心配かけた」

狂太郎は小さく返事をし、授業に集中した。

\*

昼休み。

珍しく、その日は音楽が流れた。

たまにだが、ラジオの真似事みたいなことをやる時がある。

が、狂太郎も天狗も霧雨も、まだ入学したばかりだ。

そんな事情は知らないから、普通に音楽として聴いていた。

ただ、魂慧は素早く反応を示していた。

何故なら

流れてくる音楽が、聞き覚えのある曲だったから。

それも、かなり新鮮な。

そう。

鬼神ミキが聴いてたあの曲だ。

## 18 困り事は私に

放送室に、鬼神ミキがいた。

紺のカーペットの敷かれた床には、一名の女子生徒が倒れている。倒れ方からして、恐らく、金属バットで頭を殴られたのだろう。曲げる魔術により、頭が右肩にのめり込むように密着している。

ミキは気分上々に、踊っていた。

その度にジャージの金具が音を立てている。

そんな音すらも、今のミキには届かない。

トレッドマークのヘッドホンを着けていたからだ。

「私は、そういうのは駄目だと思っな」

その忠告さえも。

委員長、黒屍綺羅羅の忠告さえも。

放送室の外に倒れた放送委員を移動させた綺羅羅は、鍵を閉め、再び、ミキのいる放送室に入ってきた。

放送室は機材もあつて、かなり狭い。

戦いには不向きな場所だ。

綺羅羅の心理は、誰にも分からない。

「関係のない人まで巻き込むのは、魔術師としてよくないよ」

「……あんた、魔術師か」

「いいえ、私は吸血鬼よ」

\*

ミキは、金属バットを上下左右様々な角度から振り抜いた。

あつて四メートルくらいその一直線の部屋を、しっちゃんかめっちゃんかにしながら、綺羅羅を壁際まで追い込む。

綺羅羅は寸前で跳躍し、ぐるりと向こう側に回り込んだ。

「意外と動けるんだねえ」

ミキは脇から背後に、バットを押した。

瞬時に見抜いた綺羅羅は、バットを掴む。

が、掴んだその瞬間、指が弾けたみたいに曲がった。

「……それが、あなたの魔術なのね」

綺羅羅は冷静に、一本一本丁寧に、指の関節を伸ばし、元に戻した。

はつきり言つて、常人で麻酔抜きでやれば、神経が完全にぶっ飛ぶ。それぐらいの激痛を、綺羅羅は何一つ感じない。

「面白い魔術。でも、使い手次第って感じね」

「……お前、何かムカつく」

ミキの無邪気に明るいあの声が、一瞬にして冷え切った。

触れてもいないカーペットに、へこみが生まれる。

## 19 真の曲者

空から人が降りてくる。

無数に散ったガラスの破片と共に降りてきた。

二十メートル下のグランドに、クッションもなく叩きつけられる。背中で軽くバウンドし、僅かな砂煙を撒いて、昼食時の人気のないグランドに倒れた。

二十メートル上、三階の放送室を確認する。

ミキが、いた。

割れた窓の枠に片足を乗せて、けたけたと笑っていた。

宙に、身を乗り出す。

前進するような飛び方から、曲げる魔術の応用 固体・液体・

気体を曲げれる により、空気をねじ曲げる。

極限までねじ曲げた空気を解放する。バネと化した空気がミキを地上へ押し出す。

ロケット花火にも似た音を鳴らしながら、ミキは綺羅羅に迫る。

このままで突っ込めば、即死は確定。

ミキは直前でバットを地に突き出し、曲げる魔術によりクッションを生んだ。

クッションとされたのは、綺羅羅。

腹ん中の物が口から吐き出てきそうな重圧を受ける。

破裂したように肋骨が折れていくのが分かる。

さすがの綺羅羅も肋骨を修復することは不可能だった。

内臓が破裂したのか、嘔せ返るように口から大量の血を吐き出した。

鉄錆と砂の味が口内に充満する。

「ヒヒヒ。私の魔術って、こうやって使えるんだ。ヒヒヒ」

これまでは固体のみが効果の対象だったが、奥を知った今、これまで不可能だった液体と気体も効果の対象にできる。

魔術師としての欠点。その真つ直ぐな性格のミキだったが、効果の柔軟性を手に入れた今、真の“曲者”となった。

「まったく。本当に余計な真似をしてくれたわ」

玄関から歩き出てきたのは、魂慧と、

「委員長！」

狂太郎だった。

今すぐ委員長に駆け寄ろうとする狂太郎に、魂慧が待ったをかける。

「安心していいわ。彼女の魔術反応は消えていないわ」

「生きてる……ってことか？」

「魔術師であることには驚かないのね」

「……………委員長、魔術師だったのか！！！」

各クラス、外の騒がしさにベランダから覗いたり、教室の窓から覗いたりしている。

ケータイに保存したりもしているし、教員に報告した者もいたようだ。

玄関前には、複数名の教員達がいる。

が、その誰もがそこから先に進めない。

来る最中、狂太郎が結界を張ったようだ。

むろん、無意識にだ。

そこには、誰も巻き込みたくないという思いが込められているのだろう。

「あー、朝の魔術師。生きてたんだー」

「ええ、おかげ様で」

「……………隣のヤツ、何か他のヤツらと違って、ゾクゾクする。すごい魔術師って　コイツだな」

スタートダッシュを切る。

ミキと、魂慧が、同時に火蓋を切った。

## 20 そんなオカルトだらけの俺の日常

力の幅を広げたミキの魔術は、魂慧を苦しめた。再生の裏返し。腐敗の力を持つてしても、ミキの魔術には敵わない。

一方的に魂慧がやられる中で、狂太郎はただ突っ立っていた。そうしている時間が長く続いていた時、ついに魂慧が倒れてしまった。

「魂慧！」

ミキはまだまだ余裕だ。

気分も音量も絶好調。

まさに独壇場。

鬼神ミキの世界。

「ヒヒヒ……遊ぼーよ」

音速のような速さで、ミキは狂太郎に着く。

勢いそのままに、バットで狂太郎を狙いにかかる。

最初から心臓狙いできた。

狂太郎はまともに受けた。

「狂太郎！」

遠くから、天狗と霧雨の声が届く。

狂太郎の体は宙に投げ出され、五メートル先の地面に叩きつけられた。

「坂魔君……」

狂太郎は大の字になって、空を仰いでいた。

「……やっぱり無理か……」

よっこらせと、片膝を押して立ち上がった。

立ち入るのをつい躊躇つてしまいそうな、異様な空気がそこにはあった。

「さすがに心臓突かれたら死ぬと思ったんだけどな……、やっぱり

り無理みたいだな」

「うはっ、もしかして、あんたってゾンビ？」

「ゾンビは私よ」

と、傷だらけだったはずの魂慧が立ち上がる。

彼女だけではない。

「で、そちらは吸血鬼」

その背後で致命傷を負い、倒れていた綺羅羅もだ。

なんだか、まあ……と、狂太郎は意味もなく照れ臭そうな仕草をしていた。

「あつちを見れば、ゾンビ。こつちを見れば、吸血鬼。結局、

そこに天狗がいて、霧雨がいて、委員長がいて、魂慧がいて」

今だから分かる。

『それが、俺の日常なんだなって』

狂太郎に足りなかったもの。それは、自覚。

一万と八百の全ての魔術を持っているという自覚を持たずに、遠ざけていたから。

魔術から逃げても、誰かは犠牲になる。

無意識ならなおのこと。

自覚を持ち、一万と八百の全ての魔術という事実を受け止め、自分の意思で魔術を使うようにする。

それが、最強の力を持つ者の『日常』あたりまえであるように。

「……つと、自己紹介がまだだったな」

狂太郎は、真の意味を込め、こう名乗った。

「坂魔狂太郎。一万と八百の全ての狂科学を持つ男だ」

## 21 俺の狂科学がこんなに最強なわけがない

「すげえ、すげえ！ ミキは興奮する。」

湧き上がる感情の全てを、天に向かって叫ぶ。

「すげえ！！」

それが、戦いの合図となった。

音速の速さで狂太郎に迫る。

バットを下段に構え、足を狙って振り抜く。

迫り来るバットを、狂太郎は踏みつけた。

「曲がれ！」

ミキが叫ぶ。

が、その言葉とは裏腹に、狂太郎の足は曲がらない。

「術式破壊の魔術を使わせてもらったよ」

ミキはバットを捨て、距離を置いた。

スウ、と精一杯息を吸って、吐き出す。

「わっ！！」

狂太郎までの距離。およそ五メートルのその間を、発した声が曲がりに曲がって回転し 螺旋回転の矢となる。

矢は見えず、捉えることは難しい。

が、狂太郎にとってすれば、捉える必要はない。

術式破壊の魔術を発動させたまま、ミキに迫る。

矢を破壊される。ミキは新たに矢を生成しようとしたが、もう作れなかった。

「魔術が……使えない！？」

「やってみるもんだな。いちいち破壊するのも大変だから、術式を封印させてもらったよ」

「すごい魔術師？ そんな生易しい表現で済むレベルじゃない。最強だ。」

魔術師から魔術を奪うなんて、もはや反則だ。

だが、反則になるのも無理はない。

何故なら、彼は

「二度と魔術を使えないようにな」

一万と八百の全ての魔術を持つものだから。

ミキの正面に立つと、彼女は膝から崩れ落ちた。

外れたヘッドホンから流れる音楽を掻き消すように。

全校生徒から、盛大な拍手が送られた。

\*

夕暮れ時の帰り道を歩きながら、狂太郎はミキとの戦いを思い出していた。

「そういえば、こうやって並んで帰るのって、もう二回目だな」

隣には、魂慧もいる。

「坂魔君は、付き合って何ヶ月記念日とか、色々と記念に囲うメルヘン女子タイプの男なのね」

「たった一言口に出しただけでその言い様か。もう言わんよ」

「それは困るわ」

「何故に」

「だって、私が坂魔君をイジメられないじゃない」

「そんな対象で俺を見てたのか!？」

閑話休題。

「委員長が言ってたわよ。助けてくれてありがとうとつって」

「ああ、別に助けたつもりはないんだけどな。あの時はまだ無意識に魔術を使ってたっばいから」

「それから一応、私からもありがとうとお礼を言っておくわ。これからもよろしくお願いするわ、坂魔君」

「これから、ね」

やれやれと狂太郎は思う。

「……というか、俺だけ魂慧って呼び捨てっておかしくないか？」

「じゃあ、魔術師殺しとでも呼んでほしいのかしら」

「一度たりとも望んだ覚えはないんだがな」

「じゃあ」

坂道を上がり切った途中、魂慧は立ち止まった。

肩にかかる髪を掻き分け、告げた。

「狂太郎。これでいいかしら」

気のせいか。

バックに映る夕陽がいつもより美しく見えた。

「ああ、それがいいな」

肩を並べ、雑談を交えながら、二人は夕陽の中に吸い込まれていった。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8456w/>

---

俺の狂科学がこんなに最強なわけがない

2011年12月16日00時49分発行